

写本「乳岩之図」(国会図書館所蔵)の研究

——写本「青洲先生療乳岩図記」との比較——

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成27年11月13日／受理：平成28年6月3日

要旨：1810年5月、飛騨高山の広瀬屋利兵衛の妻は春林軒で乳癌腫瘍の摘出術を受けた。広瀬は華岡青洲の門人である野村 鄂に手術の記録の作成を依頼した。要請に応じて野村は広瀬の妻の病歴と手術の様態を記し、乳癌手術13症例の図を付した写本を作って広瀬に贈った。これが「青洲先生療乳岩図記」である。丁寧に書写され装丁されている。この題名の写本は他に知られていない。このことはこの写本の草稿の存在を示唆するが、国立国会図書館所蔵の「乳岩之図」は内容が「青洲先生療乳岩図記」と全く同一で、図は同一人の手によると考えられ、「乳岩之図」中の誤字が「青洲先生療乳岩図記」において訂正されていることなどから、「乳岩之図」は「青洲先生療乳岩図記」の草稿ではないかと考えられる。

キーワード：野村 鄂、広瀬屋利兵衛、乳癌手術、「乳岩之図」、「青洲先生療乳岩図記」

1 はじめに

呉 秀三は『華岡青洲先生及其外科』¹⁾の「第二巻 青洲先生ノ外科(主トシテ其手術)」の中で「外傷以外ノ外科的疾患及ビ其手術」の冒頭に「乳岩」を挙げて詳細に論じた²⁾。その中で華岡家に伝わるという「乳岩姓名録」³⁾(本文には「乳岩姓名録」とある)を複製し、乳癌手術の具体例として第一例 大和五條 藍屋利兵衛母、第二例 摂州座間 河内屋清右衛門妻、第三例 飛州高山 広瀬屋利兵衛妻、第四例 讃州小豆島 長太夫妻、第五例 泉州貝塚 松波三十郎内の5症例を記している。第一例は麻沸散を投与しての最初の症例で、その詳細は1437字の「乳岩治験録」によって広く知られている。第二例は「華岡氏治術図識」に拠ったものである。第三例は第一例に次いで詳細な1243字の記録で「春林軒蔵乳岩図譜」に拠ったという。第四、第五例は各々「花岡留熱秘録」、「廣田泌子泉見聞録」からの抜粋である。第四、五例は比較的短文である。

青洲が行った乳癌手術患者140数名の名前や出身地は前記「乳岩姓名録」で知られているが、個々の症例の詳細な記録は上記したように140症例中わずか数名に留まっているに過ぎない。青洲が最も熱心に取り組んだ医術が乳癌の治療であったことは、麻沸散開発の動機が乳癌手術を行うためであったこと、麻沸散を用いての最初の手術が乳癌腫瘍摘出であったこと、青洲が治療した多様な疾患の中で患者名簿が存在するのは乳癌患者だけであることから、青洲の医術、華岡流の医学を知る上で青洲による乳癌手術を研究することは不可欠であり、この意味で個々の症例の詳細な記録は重要である。著者は第一の症例である藍屋利兵衛の母の手術に関してはこれまでの研究を著書としても発表してきたが⁴⁻⁷⁾、今回はその次に詳細な記録が残されている飛州高山の広瀬屋利兵衛の妻の手術について研究し、若干の新知見を得たので報告したい。

2 呉の「春林軒蔵乳岩図譜」と 「青洲先生療乳岩図記」

呉は上記の第三症例、飛州高山の広瀬屋利兵衛の妻の手術について原文を復刻しているが、「春林軒蔵乳岩図譜」に拠るとしている。一字の欠字があり、図は省略されているので、この写本にどのような図が付されていたかは不明である。この呉による春林軒蔵の「乳岩図譜」復刻文の末尾には次のように記されている。

広瀬生、今の事実を詳らかにして、郷党の父老に視さんと欲す。鄂に之を記すことを謁う。便ち親しく耳目にする所の崖略を記し、図に附して後に以て贈るといふ。文化七庚午夏六月七日。塾生 備後 野村鄂誌（原漢文、読みは現代仮名遣いに従った一著者）

筆録者の野村 鄂（1777-1855）は、呉の「華岡青洲先生春林軒門人録」によれば、「文化七年二月晦」に入門した「備後 芦田郡福田村 野村文剛」⁸⁾であるから、この記録を作成したのは野村が春林軒に入門してわずか3ヵ月程経ったばかりのことであった。しかし期日的には整合性がある。広瀬がなぜ入門して間もない野村に記録を依頼したのかについては全く不詳である。広瀬は飛騨高山の出身で、一方野村は安芸国中山（現在の広島市東区中山）の生まれで、備後の芦田郡福田村に来て医業を行っていた。したがって広瀬の妻が春林軒で手術を受けるまでに広瀬と野村の間に何らかの交流があったとは考えられない。上に引用した文章に従えば、患者の夫広瀬屋利兵衛は手術を親しく見学した（助手などとして手術に参画したか否かは不詳）野村 鄂に手術の記録と図譜の作成を依頼した。その要請に応じて野村が広瀬に一本を作成して贈ったというのである。したがってこの一本は広瀬に贈られたことを考慮すると丁寧に装丁されたものであったと推測される。

呉が利用した春林軒蔵の「乳岩図譜」なる史料はその著書「第三巻 青洲先生ノ著述」に載せる「華岡氏遺書目録」⁹⁾には見出されないし、その所

蔵先を今にわかには特定することは出来ない。同名の書が「研医会」の図書館に所蔵されている。巧拙は別として図とその順序は同じであるが、末尾に赤石希範の序が付されている同名異書である。もちろん野村による記録は附されていない¹⁰⁾。著者は乳癌手術症例の図に広瀬屋利兵衛の妻の手術記録のみが附された写本を長年探索してきたが、大分以前に偶然「青洲先生療乳岩図記」と題する一本を入手した。綿密に検討してみると、丁寧に装丁されていること、それまでに行われた13例の乳癌手術図（第一例は手術法が図示されているが、他は摘出腫瘍の図）と広瀬屋利兵衛の妻の手術記録のみを含むこと、そして記録は一字の訂正もなく丁寧に筆記されていること、さらに13例の図の次に広瀬屋利兵衛の妻の手術記録が記されて、題名「青洲先生療乳岩図記」中の「図記」と一致することから、この写本が広瀬屋利兵衛に贈られた一本ではないかと推定した。そしてこの史料についての詳しい論考にカラー写真を付して拙著に収載した¹¹⁾。もしこの一本が広瀬に贈呈されたものであるとすれば、その草稿が別にあるはずである。このように考えて「青洲先生療乳岩図記」の草稿の探索を続けてきたが、今回、それと思われる一本を漸く見出した。

3 国会図書館所蔵の「乳岩之図」

この史料は「乳岩之図」と題され、国会図書館の所蔵である。縦26.0 cm、横18.6 cmの四つ目袋綴じの和紙で、赤色の亀甲模様に入った表紙である。題箋はないがそれが剥落した形跡がある。比較的粗末な表紙であることを考えると、後に附された仮表紙と考えられる。本来の表紙には左上に直接「乳岩之図」と墨書されており、中央やや上に「帝国図書館」の角印、その下に「請求・昭和三・一一・五」の丸印が押されている（図1）。この表紙裏には文字の記入はない。1丁表から12丁表までは藍屋 勘の坐像から始まる13症例の手術や摘出腫瘍塊の図である。12丁裏は白紙で、広瀬屋利兵衛の妻の手術記録ともいべき「記青洲先生療乳岩」が13丁表から15丁裏まで丁寧に記されている。末尾に「于時 文化七年庚午夏六

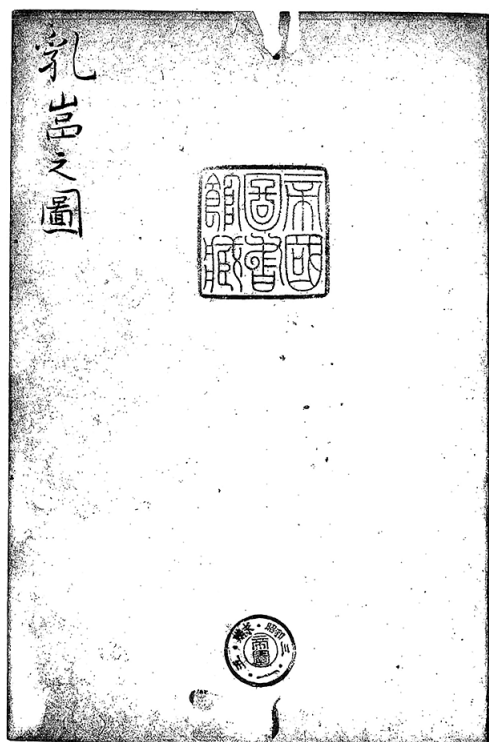


図1 「乳岩之図」の表紙

月七日 備後 野村鄂誌」とある。ただしこの「記青洲先生療乳岩」が野村自身の筆録に拠るか否かはわからない。比較すべき野村の手跡がないからである。

半丁9行で、一行当たりの字数は区々であるが、19-27字（割注を除く）である。つまり「乳岩之図」は「青洲先生療乳岩図記」と同様に13症例の患者の記録（主として摘出腫瘍塊の図）+広瀬利兵衛妻の手術記録のみで構成されている。現在の知見ではこの内容のみの写本は、本稿で論じている「乳岩之図」と「青洲先生療乳岩図記」の2本だけである。

「乳岩之図」の内容を「青洲先生療乳岩図記」と比較して示したのが、表1である。これを見る限り「乳岩之図」と「青洲先生療乳岩図記」は図2に示すように手跡に優劣は認められるが、全く同一の文章である。ただ一カ所、「乳岩之図」の15丁表1行22字「医」が左側に点が二つ付され、右に正しい「匠」の字が記されている。「意匠所図一日而得之」とあるが、これでは意味をなさず

「意匠所図一日而得之」（意匠図く所、一日にして之を得る）である。これは「青洲先生療乳岩図記」の15丁表8行18字において「匠」と正しく訂正されている。このことは「乳岩之図」の「記青洲先生療乳岩」を訂正して筆録したのが「青洲先生療乳岩図記」の「記青洲先生療乳岩」ではないかということを示唆する。

両者において誤字が散見される。例えば「乳岩之図」の13丁表3行の「文化戊辰正月」は正しいが、「青洲先生療乳岩図記」では13丁表3行「文化戊辰正月」と誤っている。この誤りは書写時に起こりうる。同じく前者の13丁表4行「鶏卵」（「鶏卵」の誤記）は後者でも「鶏卵」（13丁4行）と誤りが踏襲されている。また「乳岩之図」において本字で記されている字、例えば「圀」（13丁表6行）は「青洲先生療乳岩図記」では「圀」（13丁表6行）と略字で書かれており、同様に「乳岩之図」の「餘」（13丁裏5行）は「記青洲先生療乳岩」では「余」（13丁7行）となっている。前者の「其岩果減長一寸圀一寸四分」（14丁表9行-14丁裏1行）は、後者では「其岩減長一寸圀一寸四分」（14丁裏5-6行）となって「果」が欠落している。さらに前者の「最後但覚微痛爾也」（15丁表8行）は後者では「最従但覚微痛爾也」（15丁裏7行）とあり、「後」が「従」となって誤記されている。これらの誤りは「乳岩之図」の「記青洲先生療乳岩」の書写時に起こり得ることで、「乳岩之図」を書写したのが「青洲先生療乳岩図記」の「記青洲先生療乳岩」であることを示唆している。ただし両者は同筆ではないことは両写本の1丁表を示した図2を見れば一目瞭然である。

4 「乳岩之図」と 「青洲先生療乳岩図記」中の図の説明文と 「乳巖姓名録」との比較

「乳岩之図」と「青洲先生療乳岩図記」中の図の説明文は表1に示したようにわずかに「五」と「吾」、「劬」と「州」の違いが認められるだけで、本質的に同一と見做してよい。これら二写本の記載と呉が引用する「乳巖姓名録」の当該の条を比較したのが表2である。

表1 「乳岩之図」と「青洲先生療乳岩図記」の内容の比較

丁・表裏	説明 「乳岩之図」	「青洲先生療乳岩図記」
表紙	現在の赤色亀甲模様の表紙は仮表紙で題箋なし。 四つめ綴、本来の表紙は本文と同じ料紙で、左上に 「乳岩之図」とある。国会図書館の印2カ所	茶褐色横縞模様、四つ目綴、題箋「青洲先生 療乳岩図記」(2行)
表紙裏	文字なし	文字なし
1丁表	藍屋 勘の坐姿 右下に篆刻印あり	左に同じ
1丁裏	上にコロンメス、下に鋏の図	左に同じ
2丁表	乳房に切開創の図	左に同じ
2丁裏	切開創に左手指を挿入している図	左に同じ
3丁表	右手にコロンメスを持ちながら両手を創中に挿入の図	左に同じ
3丁裏	両手を挿入し、腫瘍底を剥離する図	左に同じ
4丁表	摘出腫瘍の図(上下に2図) 「和州宇智郡五條駅藍屋利兵衛母歳六十」(右に2行)	左に同じ
4丁裏	摘出腫瘍縦切断の図(左右に2図)	左に同じ
5丁表	摘出腫瘍とその縦切断の図(左右に2図) 「紀州橋本駅鍛冶屋治兵衛妻歳三十五」(右下に2行)	左に同じ
5丁裏	乳房に斜めの切開創 「紀州伊都郡麻生津郷西之脇村彦兵衛妻歳五十七」 (上に4行)	左に同じ
6丁表	摘出腫瘍と縦切断の図(上下に2図)	左に同じ
6丁裏	摘出腫瘍と縦切断の図(上下に2図) 「紀州橋本駅三河屋治兵衛母歳六十」(右に1行)	左に同じ
7丁表	摘出腫瘍と横切断の図(上下に2図) 「阿州沖之洲水主平七母歳五十六」(右に1行)	左に同じ
7丁裏	乳房に腫瘍の図 「紀州有田郡保田郷杉野原村重助妻歳四十三既穿潰而 五六月其囲八寸其深一寸」(上に6行)	左に同じ (上に7行)
8丁表	摘出腫瘍(1図)	左に同じ
8丁裏	摘出腫瘍と縦切断の図(上下に2図) 「紀州有田郡須原村佐五右衛門母歳六十四既有穿潰之勢」 (右に2行)	左に同じ 「佐吾右衛門」
9丁表	摘出腫瘍の図(1図) 「紀州名草郡大川浦傳兵衛母歳五十五」(右に1行)	左に同じ
9丁裏	乳房下部に切開創(1図) 「阿州板野郡撫養南浜天野屋幸作母歳五十四」(右に2行)	左に同じ (上に3行)
10丁表	摘出腫瘍と横切断の図(上下に2図)	左に同じ
10丁裏	摘出腫瘍と横切断の図(上下に2図) 「紀州橋本駅三河屋治兵衛母六十再発」(右に2行)	左に同じ 「紀州」(右に1行)
11丁表	摘出腫瘍と横切断の図(上下に2図) 「美濃羽栗郡不破一色村文八妻歳三十七」(中央に6行)	左に同じ
11丁裏	摘出腫瘍と横切断の図(上下に2図) 「紀州日高郡土生邑徳右衛門妻歳四十八」(右に1行)	左に同じ
12丁表	摘出腫瘍(1図) 「和州五條駅勝股元碩妻歳三十余」(右に1行)	左に同じ
12丁裏	白紙	左に同じ
13丁表	記青洲先生療乳岩(半丁は9行, 1行19-27字)	左に同じ(半丁は9行, 1行20字)
13丁裏	「・・・之治也興葉」で終了	13丁裏2行1字目に相当
14丁表	「・・・生三角生皆」で終了	14丁表3行19字目に相当
14丁裏	「・・・日其岩果減」で終了	14丁裏5行15字目に相当
15丁表	「・・・末如之何」で終了	15丁表7行16字目に相当
15丁裏	「・・・先穿之處也」で終了	15丁裏9行9字目に相当
16丁表	なし	16丁裏3行6字目に相当
16丁裏	なし	本文の最後は16丁表8行10字目に相当 「備後 野村鄂記」で終了
裏表紙	表紙と同じ模様	左に同じ

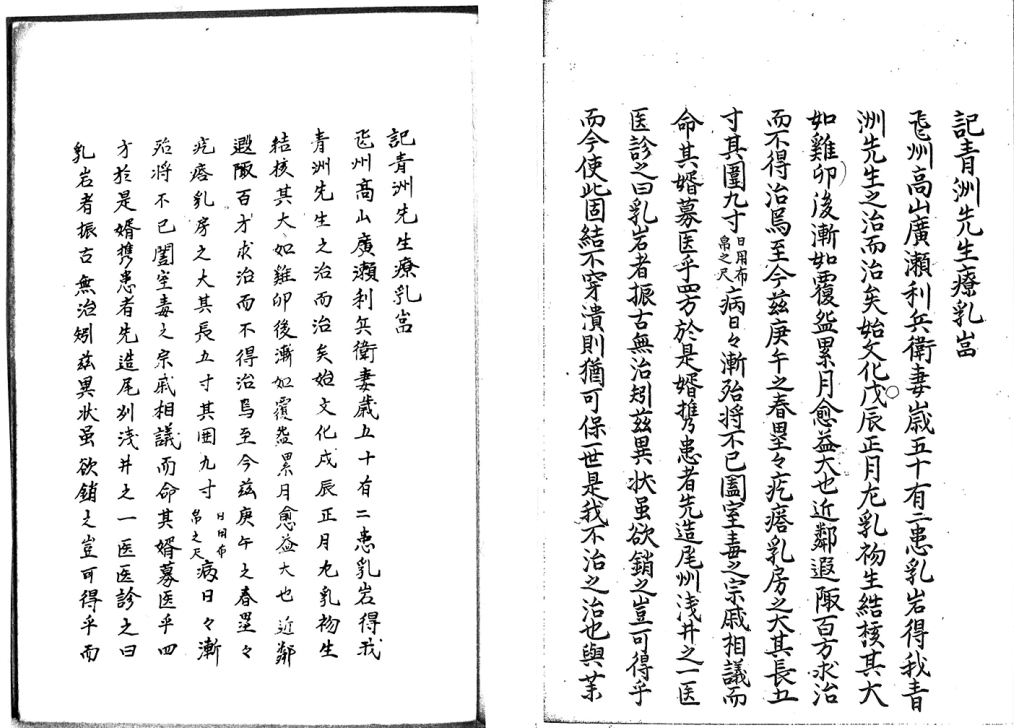


図2 二写本の「記青洲先生療乳岩」の冒頭の部分。右は「乳岩之図」から、左は「青洲先生療乳岩図記」から。

写本と異なる表記の上に○印を付した。参考のため表の末尾に「乳巖姓名録」の広瀬屋利兵衛の妻の記述を記した。正しい手術日は「文化七年五月十一日」であるが、「乳巖姓名録」ではどうした訳か「文化十年九月望」の条に記入されている。門人が「乳巖姓名録」の「文化七年五月十一日」の条に記載するのを失念し、三年ほど経って広瀬から妻が健在であるとの連絡が春林軒になされて、その名が「乳巖姓名録」に欠落しているのが判明して漸くその名を記入したというのが真相であろう。

第2症例は両写本では「紀州橋本駅鍛冶屋治兵衛妻歳三十五」であるが、「乳巖姓名録」では「紀州橋本駅 鍛冶治助 妻（歳三十）」となっている。京都大学富士川文庫の「華岡氏治術図識」（富士川文庫 ハ/83）では「紀州橋本駅鍛冶屋甚兵衛妻三拾五」となって、年齢は写本と一致しているが「治」が「甚」になっている。この種の図を描いた写本の中で最も古いと思われる国際日本文

化研究センター（宗田文庫）の「乳癌図譜」（仮題）（宗田文庫 SC/857/Ny）では「紀州橋本駅鍛冶屋治兵衛妻歳三十五」となっているので、ここで論じている写本の記述が正しく「鍛冶屋治兵衛」をもって正とすべきであろう。第8症例では稿本の「大川浦」が「乳巖姓名録」では「大河」になっているが、「大川浦」が正しく、第9症例では写本の「天野屋幸作」が「乳巖姓名録」では「京屋幸作」となっている。名は同じで屋号だけの違いであるから、これも問題はない。

「青洲先生療乳岩図記」の「記青洲先生療乳岩」と図の説明文の筆跡は同一人によると見做して差支えない。例えば「乳」の第8画や「歳」の第11画の真上への跳ね上げなどが同一である。「乳岩之図」の「記青洲先生療乳岩」の筆跡と図の説明文の筆跡は同一人によるとは即断できない。図の説明文の筆跡は本文に比較して稚拙である。「彡」の第一画が高い位置にあるのは両者に共通しているが、一方「先」の第6画、「歳」の第11画の

表2 二写本に見られる症例の表記と「乳巖姓名録」の表記の比較

「青洲先生療乳巖図記」「乳岩之図」の住居と患者名 呉の「乳巖姓名録」中の住居と患者名など

- 1 和州宇智郡五條駅藍屋利兵衛母歳六十・文化元甲子年十月既望 和州五條駅 藍屋利兵衛 母
- 2 紀州橋本駅鍛冶屋治兵衛妻歳三十五・文化四丁卯年正月念九 紀州橋本駅 鍛冶治助 妻(年三十)
- 3 紀州伊都郡麻生津郷西之脇村彦兵衛妻歳五十七・文化四丁卯年三月二十九日 紀州 麻生津彦兵衛 内
- 4 紀州橋本駅三河屋治兵衛母歳六十・文化五戊辰年二月望 紀州 橋本駅 三河屋治兵衛 内
- 5 阿州沖之洲水主平七母歳五十六・文化五戊辰年三月七日 阿波徳島沖洲 水主平七 母
- 6 紀州有田郡保田郷杉野原村重助妻歳四十三・文化五戊辰年六月十三日 紀州山田保杉原村 重助 内
- 7 紀州有田郡須原村佐吾右衛門母歳六十四・文化五戊辰年五月望 紀州有田郡須原 佐五右衛門 母
- 8 紀州名草郡大川浦傳兵衛母歳五十五・文化五戊辰年七月念二 紀州天河 傳兵衛 内
- 9 阿州板野郡撫養南浜天野屋幸作母歳五十四・文化五戊辰年八月十三日 阿波撫養 京屋幸作 母
- 10 紀州橋本駅三河屋治兵衛母六十再発・文化六己巳年九月十三日 紀州橋本駅 三河屋治兵衛 母(再発)
- 11 美濃羽栗郡不破一色村文八妻歳三十七・文化六己巳年二月二日 美濃不破一色村 文八 内
- 12 紀州日高郡土生邑徳右衛門妻歳四十八・文化六己巳年四月四日 紀州日高郡土生村 徳右衛門 内
- 13 和州五條駅勝股元碩妻歳三十余・文化六己巳年五月念四日 和州五條駅 勝股元碩 内

○飛州高山 広瀬屋利兵衛 妻五十有二・文化十癸酉年九月既望 飛州高山 広瀬屋利兵衛 妻

(書_先生竝當時門人侍坐之像_。拜礼。香火一日不_忘。每至_月朔_。供美膳_以祭云。)

表3 「乳岩之図」と「青洲先生療乳巖図記」の筆跡の関係

「乳岩之図」の本文	⇔	「青洲先生療乳巖図記」の本文
「乳岩之図」の本文の筆跡	≠	「青洲先生療乳巖図記」の本文の筆跡
「乳岩之図」の図	⇔	「青洲先生療乳巖図記」の図
「乳岩之図」の図の説明の筆跡	≠	「青洲先生療乳巖図記」の図の説明の筆跡
「乳岩之図」の本文の筆跡	≠	「乳岩之図」の図の説明の筆跡
「青洲先生療乳巖図記」の本文の筆跡	=	「青洲先生療乳巖図記」の図の説明の筆跡

記号の説明

⇔：内容が一致 =：筆跡が一致(同筆) ≠：筆跡が一致しない(異筆)

最後は「記青洲先生療乳巖」では上に跳ね上げているのに反し、説明文では「歳」の第11画は13例中12例で右斜め下に長く延ばされており、両者に顕著な違いが認められる。両写本に見られる文字が同筆か異筆かをまとめたのが表3である。

5 「乳岩之図」と「青洲先生療乳巖図記」に見られる図の比較

「乳岩之図」と「青洲先生療乳巖図記」の両者に見られる1丁表か12丁表までの図とその順序は同じである。共に彩色であるが両者の色調は極めて近似している。ここでは彩色でなく白黒でしか示せないが、両稿本の13症例のすべての図に

ついて、色調はもちろんのこと、それらの輪郭は極めて近似している。その中の代表例「藍屋 勘の坐像」を図示したのか図3で、図4~8は他の同種の写本からの坐像である。比較のため各図の大きさは調整してある。第3図であるが、「乳岩之図」と「青洲先生療乳巖図記」の1丁表の図である。髪型、簪の傾き具合、額の三本の皺、目尻の皺、人中の二本の皺、鼻唇溝、前頸部の二本の縦皺、左手で左乳房を支えるポーズ、見えるのは左手の指2本、着物の皺の状態と帯、右膝の上においた右手の位置と五本の指、その長い小指など両者は極めて近似しており、同一人物が同じ図を2部作成したと考えたい。他の図についても同様



図3 図の冒頭に描かれている藍屋 勘の坐像。右は「乳岩之図」から、左は「青洲先生療乳岩図記」から。



図4 藍屋 勘の坐像（彩色，杏雨書屋所蔵「華岡奇患図」（記号 乾 4487-1）より許可を得て掲載。

である。この藍屋 勘の坐像について他の写本ではどうなっているかを見たのが図4～8である。図4と図5は簪、髪型、額の皺、着物の具合、両手の位置などに違いが認められるが、全体として



図5 藍屋 勘の坐像（彩色，東北大学所蔵「華岡家奇患図」（記号 狩9-22283）より許可を得て掲載。

「乳岩之図」と「青洲先生療乳岩図記」の図の系統に属することが理解される。一方、図6～8は藍屋 勘の顔を左側面から描いている点で図3～5とは大きく異なり、別系統の写本からの転写であることが知られるが、これらの子細を見ると着物の模様によって図6の系統と図7、8の系統に分かれる。全体的に見て本稿で論じている二写本



図6 藍屋 勘の坐像(彩色, くすり博物館所蔵「華岡塾着色図」(記号 大同業室文庫35733)より転載。



図8 藍屋 勘の坐像(彩色, 杏雨書屋所蔵「乳癌割截図一卷」(記号 乾4242)より許可を得て掲載。



図7 藍屋 勘の坐像(彩色, 杏雨書屋所蔵「華岡奇患図一卷」(記号 乾4487-2)より許可を得て掲載。

の勘の図と図4~8は異なっていることは明瞭である。

著名な芸術作品であれば、絵師による精密な模

写ということもあろうが、今回問題にしているのは比較的単純な図であるから、「乳岩之図」と「青洲先生療乳岩図記」の図は異なった人物による模写というよりも同一人物による図の2部作成を可能性として考えたい。その一部は草稿として春林軒に残され、そしてもう一部は広瀬への贈呈用に供されたのであろう。唯一つ疑問に思うのは、これらの中に広瀬屋利兵衛の妻の摘出腫瘍の図が含まれていないことである。当然、これも含まれて然るべきと思われるが、摘出した腫瘍の周囲が一尺三寸、重さ三百七十銭という大きさが広瀬の関係者に与える影響を考慮して、実際には描かれたものの、ここで論じている二写本の中に収めなかったと考えている。図9は杏雨書屋所蔵の一写本「乳癌割截図一卷」(天保3年, 端月による模写)(記号と番号 乾4242)に描かれた広瀬の妻からの摘出腫瘍塊である。

6 春林軒における記録や図の作成について

野村による広瀬屋利兵衛の妻の手術記録の作成は、当時の春林軒における記録や図の作成についての状況を解明する点で意義がある。前述したように入門して3カ月ばかりの野村が広瀬から依頼



図9 広瀬屋利兵衛の妻からの摘出腫瘍塊（彩色，杏雨書屋所蔵「乳癌割截図一卷」（記号 乾 4242）より許可を得て掲載。

されたのはにわかに理解しがたいが，野村が1810年に33歳という比較的高年齢で春林軒に入門したことと関係があるのかも知れない。広瀬により信頼に足ると評価されたからであろう。いずれにせよ，このことは患者からの要請があれば，門人が自由に手術の記録を作ることが出来たことを物語っている。青洲の許可を要したことは当然考えられるところである。さらに春林軒に所蔵されていた乳癌手術の図（主として摘出腫瘍の図）を自由に模写することが出来たことを物語っている。つまり青洲は記録の作成や図の作成，模写を自由に認めていたと推察される。青洲自身「藍屋勘」の手術記録「乳巖治験録」の末尾に「之を同志に示す為に図を作り之を識すと云うのみ」（原漢文）と書いている。青洲は当初「同志に示す為に」図を描かせたのであり，それらは教育の目的で門人に供覧され，さらには手術患者にも術前か術後に示された可能性も否定できない。以上によって次のことが言えると思う。

飛驒高山の広瀬屋利兵衛は妻の乳癌手術の記録作成を門人野村 鄂に依頼した。これに応じて野

村は手術記録を作り，それにそれまでに描かれた手術の図，摘出標本の図を付して草稿を作った。これが国会図書館所蔵の「乳岩之図」と思われる。野村は同じ図を2部作らせ，一部は草稿用としたと推察される。この草稿の「記青洲先生療乳癌」が野村の手になるか否かは不明である。もう一部は広瀬屋利兵衛への贈呈用とした。著者旧蔵の「青洲先生療乳癌図記」は野村が広瀬に贈った一本と思われるが，筆録したのは草稿とは異なる人物である。現在の知見では「記青洲先生療乳癌」と13症例の図のみを含む写本は，本稿で論じている2本だけである。

擱筆するに際して貴重な史料の閲覧を許して戴いた「研医会図書館」（中泉行弘所長）に感謝の意を表す。

参考文献および注

- 1) 呉 秀三、『華岡青洲先生及其外科』。東京：吐鳳堂；1923.
- 2) 文献1. p. 254-86.

- 3) 文献1. p.274-86.
 4) 松木明知. 『華岡青洲の新研究』. 弘前: 松木明知; 2002.
 5) 松木明知. 『華岡青洲と「乳巖治験録」』. 弘前: 松木明知; 2004.
 6) 松木明知. 『華岡青洲と麻沸散—麻沸散をめぐる謎—』(改訂版). 東京: 真興交易医書出版部; 2008.
 7) 松木明知. 『華岡青洲研究の新展開』. 東京: 真興交易医書出版部; 2013.
 8) 文献1. p.491.
 9) 文献1. p.381-6.
 10) 「研医会」図書館の「乳〇図譜」は整理番号が4762で, 彩色. 嘉永2年の澤井宗順による写本であるが, 図, 文章共に稚拙. 二丁表から十二丁表までの図は本稿で論じている写本の図と同じであるが, 十三丁表, 同裏に赤石希範の序が記されている. ただし赤石の名はない. したがってこの写本は呉が参照にした「乳巖図譜」ではない.
 11) 文献5. のp.67-92. 「青洲先生療乳巖図記」のカラー写真はp.92とp.93の間に収載.

A Study of the Manuscript *Nyugan no zu*, in the Possession of the National Diet Library: A Comparison with the Manuscript *Seishu sensei ryo nyugan zuki*

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

In May 1810, the wife of Rihei Hiroseya, from Takayama, Hida Province, received an excision of a breast cancer tumor at Shunrinken in Hirayama, Kishu Province. Hirose asked Gaku Nomura, one of the Hanaoka's disciples, to make a manuscript describing his wife's surgery. In reply to Hirose's request, Nomura made the manuscript including her history and operative procedures, with illustrations of 13 other surgical cases of breast cancer, and he gave it to him the next month. The manuscript, titled *Seishu sensei ryo nyugan zuki*, is extant and this is considered to be the one that Nomura gave Hirose because there has been no other manuscript with this title and the manuscript is carefully recorded and bound. This suggests that there must be a draft of *Seishu sensei ryo nyugan zuki*. A manuscript titled *Nyugan no zu* is in the possession of the National Diet Library and it is considered to have been originally stitched temporarily, and then bound later. However, the contents of this manuscript are identical to those of *Seishu sensei ryo nyugan zuki*. In particular, illustrations in both manuscripts are highly likely have been made by the same illustrator, although sentences in both manuscripts are recorded by different hands. Thus, it is likely that Nomura asked an illustrator to make two sets of illustrations and Nomura used one for his presentation to Hirose and another for a draft, and that *Nyugan no zu* is a draft of *Seishu sensei ryo nyugan zuki*.

Key words: Gaku Nomura, Rihei Hiroseya, breast cancer surgery, *Nyugan no zu*, *Seishu Sensei Ryo Nyugan Zuki*